コロナ罹患記

志村　良知

確たる根拠なしに自分には関係ないと思っていた covid19(以下コロナ)に罹ってしまった。事の発端は信州旅行の帰りの新幹線内での喉に違和感だった。私は喉が弱く、風邪はまず喉に来る。今回も風邪だなと思った。

しかし、頭の中は既に重症だったらしい。東京駅に着いたらもう家に帰りたい一心で東海道新幹線のホームを目指すが、慣れた駅なのに方向が分からない、不信と不満の家内を引っ張り回して右往左往。新横浜駅に着いたのは8時近く、食事しようという家内を無視、家に何かあるだろうとタクシー。

家に着いて荷物を整理しシャワーを浴びて着替えようと、服を脱ぐと異様に寒い。「エアコン三台フルだからだよ」と家内。しかし、シャワーのお湯を浴び濡れた皮膚が外気に触れると歯ががちがちいう猛烈な寒気。いわゆる悪寒である。

体温計を咥えると鼻先で数字が上がっていくのがぼんやり見える。止まった。３９度３分。自分の体温がこんな値を示すのを見るのは初めてだ。不安を通り越え恐怖を感ずる。「寒いから寝る」と風邪薬を飲んでベッドにもぐり込む。寝れば熱は下がるさ、と思ったが汗は多少かいたものの翌朝も３８度３分。

全身疼痛のうえ、座ろうとすると体が前後左右に揺れて静止しない、壁伝いでないと危なくて歩けない。これは只事ではない、コロナというやつか。家内が奥さん情報網で調べ薬剤師に相談して、コロナ罹患時の処方薬と成分が同じ市販薬カロナールを調達してきてくれる。

その日はそれを飲み、氷嚢を脇の下に挟んで恐れ入って過ごす。翌朝３７度６分、ネットで発熱外来を探し、予約を入れる。翌日、四日目。タクシーで新横浜へ。検査結果は見事コロナ陽性、インフルはＡもＢも陰性。家内は全部陰性。処方薬はカロナール。以降、熱も症状も順調に回復、約一週間で平熱に。家内も発症せず。

識者に伺ったところ、最初の数日の大山鳴動の発熱騒ぎは、免疫が全くない変異株での感染が疑われる症状とのことだった。

(Aug 22 2924)